

【実践報告】

## ジェンダー平等推進に寄与する学校体育の在り方の一提案 ～「男女共習体育」を包含する「ジェンダー平等な体育」について～

A Design of Physical Education Classes that Contribute to the Promotion  
of Gender Equality

—“Gender-Equal Physical Education” that includes “Coeducational Physical Education”—

佐野 信子

SANO Nobuko

### I. はじめに

筆者は1995年に「家庭も仕事もスポーツも—子育て期にある高学歴女性の性別役割分業の実状と運動・スポーツ実施状況について—」と題する修士論文をまとめた。現在でも未だ解消されていないが、当時の筆者も一児の親として、多くの女性と、いくらかの男性（この時期には、未だ、「その他の性」への着眼はなかった）が抱えていた「育児・家事と仕事」の両立の難しさを実体験として経験していた。自らの日々の実践を踏まえ、「家事・育児と仕事」で割かれる時間や体力を前に、さらに「運動・スポーツ」を加えるにはどうしたらよいか、自問自答しつつ、論を展開した。この修士論文は、筆者の研究テーマである「体育・スポーツとジェンダー」に関する論考の礎となっている。

その後、「スポーツにみる性差—その自然と文化—」を執筆した。これは、筆者が1997年に『体育の科学』誌に掲載いただいた文献のタイトルである。当時、筆者は出身校である大学で助手として勤務させていただき、私生活では4歳になる子どもの親であった。子育てをする経験を通して、子どもがいかに、その子に振り当てられる「ジェンダー」により、「女の子」化、あるいは、「男の子」化していくことを、様々なデータをもとに考察していた（佐野, 1997）。

さらに、いくつかの大学で非常勤講師をさせていただきながら、「女子」に注目し、学校体育における「女子」への指導の難しさを考察しつつ、さらに発展させ、体育の「男女共習」に関する研究へと軸足が定まった。

### II. 「男女共習体育」に対する検討—ジェンダーの視点に立った「男女共習体育」の模索—

2001年には、『体育科教育』誌において、「学校体育における男女共習—今後の課題と展望—」と題する論考を執筆した。そこでは、他の研究者によるデータを用いて「男女共習授業」について紹介した後、「男女共習」授業の問題（性別カテゴリーの頻繁な使用）と、「男女別習」授業の問題点（典型から外れた者の不満：体育が得意な女の子の不満、体育が苦手な男の子の不満）に

ついて論じた。

2002年4月からは、講師として男女共学の附属中学校を有する教育学部に赴任できることとなった。そこでは、附属中学校との結びつきがとて密接であり、筆者も足繁く附属中学校に向き、日々、教育について議論する中で、私の研究テーマについて附属中学校教諭の皆さんに話しを聞いていただき、さらに、関心を持っていただけた。そこでの実践は、佐野（2003）、佐野（2004）に詳しい。

筆者は、現在、スポーツウエルネス学科の2年生以上が在籍するコミュニティ福祉学部の授業に加え、本学部の1年生を対象とした、教員持ち回りの必修授業や、学部・学年を問わない選択制の授業において、「Nature or Nurture」（「氏か育ちか」）という視点を抱いてもらうことの必要性について、タイミングを見計らって伝えている。本稿を執筆するにあたり、筆者のこれまでのいくつかの論文を振り返り、これまで、「氏か育ちか」という立ち位置に立つことで、ジェンダーに関する問題に挑んできたことに気づいた。その過程において、「男女」という「性別二元性（男女二元論）」のとらわれから距離をとるようになり、徐々に「ジェンダー平等」を視野においた研究へと展開した論考を執筆するようになっている。

### Ⅲ. 本学部での授業実践について—「男女別」から「多様なジェンダー別」への着眼へ—

本学部の1年生必修授業では、春学期に持ち回りの講義1コマと、秋学期に持ち回りの演習2コマを担当している。本稿では、スポーツやウエルネスに関する授業であり、7人の教員が授業を持ち回る演習2コマ（教員7人×2コマ）の「スポーツウエルネスワークショップA」の筆者の担当分について紹介していく。2コマのうち、1コマは、教室での演習とし、もう1コマは体育館のアリーナにおける実技としている。約30人の学生達のグループを担当することになる。教室での演習は、グループがジェンダー混合になるように、授業開始時に全員に教室から出てもらい、ひとり一人教室に入り直してもらう際に、性自認別に用意した1~6のカードの山から1枚ずつ上から取り（この際、どのカードを引くかは他の者に見られない）、ジェンダーが固定しないような6グループに分かれてもらう。まずはブレインストーミングとして、中学校や高等学校の体育の実際がどのようなものであったか、しばらくの時間を使って紹介しあうことから作業を始めてもらう。次に、本授業の過去の実践も交えた動画を視聴してもらう。これは、同じ内容で実践された筆者のかつての授業と、筆者のアイデアを取り入れていただいた中学校の授業を、2018年2月5日にNHKの首都圏ネットワークで約10分間程度、取り上げられたものである。動画の前半は、体育・スポーツとジェンダー研究に詳しい、中学校教諭の君和田雅子先生に、ご自身のクラスでフォークダンスを取り上げていただき、生徒の皆さんにダンスでのジェンダー・バイアスの気づきを促す内容である。動画の後半は、本学における筆者の実践であり、受講生達は視聴後に自分達でジェンダーバイアスフリーな体育授業を作り上げる上で、中学校時代に自らが経験してきた体育授業をジェンダーの視点から振り返り、また、自分達の先輩達の取組みを視聴することができ、とても重要な時間となる。視聴後に筆者が、「ジェンダー平等な体育」につい

て講義する。講義内容は以下の通りである。

本年度は、2023年8月31日に、日本体育・スポーツ・健康学会第73回大会で発表した「ジェンダー平等社会における学校体育の在り方に関する研究」用に作成したスライドの一部を紹介しながら講義した。

まず、図1を用いて、「(少なからぬ) 現行の男女共習体育」が、「ジェンダー平等な体育」と必ずしもイコールなものではないことの認識を促す。男女共習体育の実践例の中には、例に示したように、生徒が「『女性』か『男性』」かに二分されてしまうことにより名簿も男女別となることが多く、例えば、毎授業開始時の点呼で「常に男子が先、女子が後」といったジェンダー・バイアスを生徒達に植え付けてしまうところから理解を促す。また、全身持久力の評価(男子に厳しく、女子に優しい)に見られる男女差などから「男は強い、女は弱い」といった観念を知らず知らずのうちに生徒達に伝えていることへの気づきを促す。

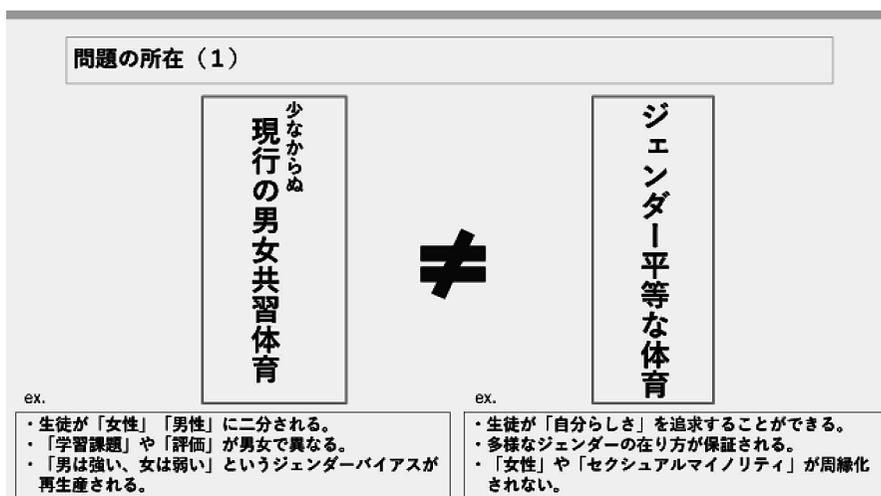


図1 問題の所在(1)

佐野信子(2023)「ジェンダー平等社会における学校体育の在り方に関する研究」日本体育・スポーツ・健康学会第73回大会で発表

図2から「男女共習体育の本来あるべき姿」は「ジェンダー平等を標榜する体育」であり、「女子」と「男子」とに最初から分けられてしまう男女共習体育において、この理念を貫くことは、指導者がジェンダー・バイアスを発露しないように、というかなり強い注意のもとに生徒に対峙する必要がある。また、日ごろからジェンダー平等について高い意識を有し、「ジェンダー不平等な男女共習授業」を展開しないように、かなりの用心深さが必要となる、ということを履修者達に伝える。次に図3を示し、体育が未だに性別二元性(男女二元論)から脱却していないことについて、ひとり一人の意見を持てるように誘いながら、授業を進めていく。字数の制限上、本稿では、筆者の授業展開について、ここまでの報告とする。

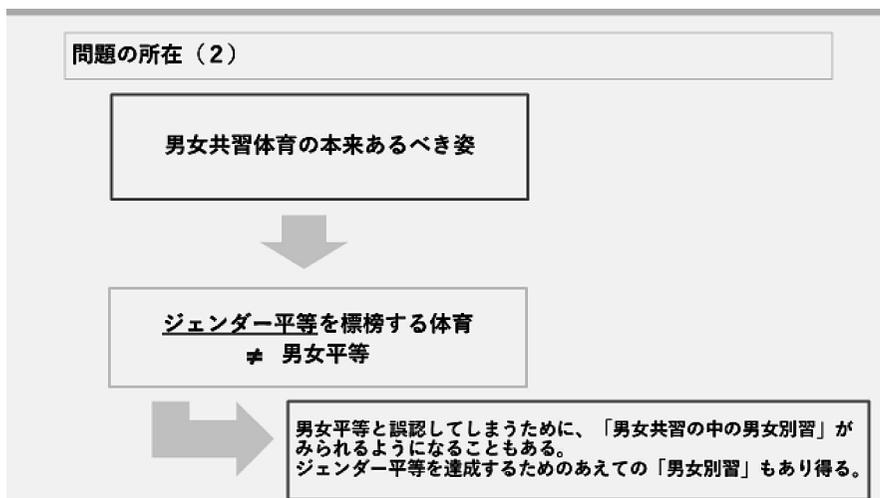


図2 問題の所在 (2)

佐野信子 (2023)「ジェンダー平等社会における学校体育の在り方に関する研究」日本体育・スポーツ・健康学会第73回大会で発表

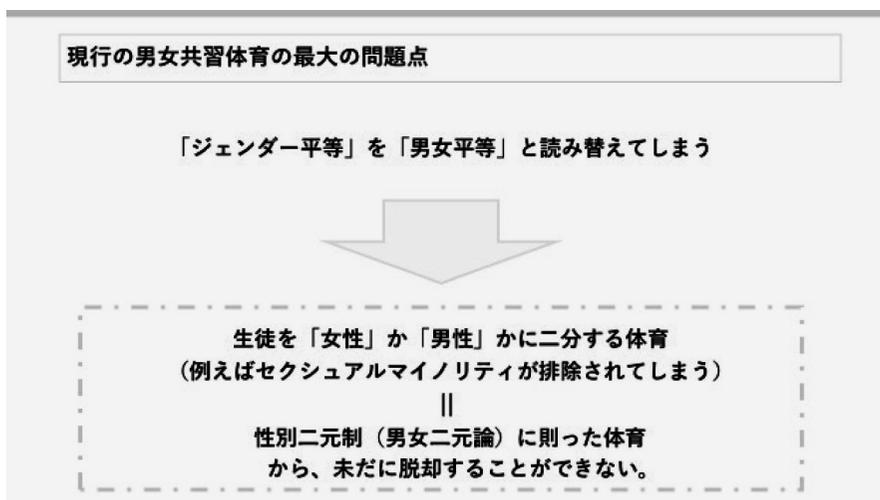


図3 現行の男女共習体育の最大の問題点

佐野信子 (2023)「ジェンダー平等社会における学校体育の在り方に関する研究」日本体育・スポーツ・健康学会第73回大会で発表

履修者達の創造する「ジェンダー・バイアス」をできるだけ感じさせないスポーツの在り方については、別稿で紹介したい。本稿に関する最近の論考3点は、以下の通りである (佐野 2022a, 佐野 2022b, 佐野 2022c)。

## 文献一覧

- 佐野信子(1995)「家庭も仕事もスポーツも—子育て期にある高学歴女性の性別役割分業の実状と運動・スポーツ実施状況について—」お茶の水女子大学大学院修士論文。
- (1997)「スポーツにみる性差—その自然と文化—」『体育の科学』第47巻第6号, pp.409-414。
- (2001)「学校体育における男女共習—今後の課題と展望—」『体育科教育』第49巻第7号, pp.30-33。
- (2003)「体育の男女共習に関する中学生の意識」『弘前大学教育学部紀要』89号, pp.131-139。
- (2004)「男女共習vs男女別習—男女共習授業は本当に必要だろうか?」飯田貴子ら編『スポーツ・ジェンダー学への招待』, pp.221-224, 明石書店。
- (2004)「一人ひとりの体育的学力を伸ばす体育授業の在り方について—本学部附属中学校での実践から—」『弘前大学教育学部紀要』91号, pp.45-49。
- (2022a)「ジェンダー：スポーツにおける男女二元論の攪乱」高峰修ら編『現代社会とスポーツの社会学』, pp.175-187, 杏林書院。
- (2022b)「スポーツとジェンダー・セクシュアリティ」日本子どもを守る会編『子ども白書2022』, pp.182-183, かがわ出版。
- (2022c)「男女共習体育授業を一步立ち止まって考える」『体育科教育』第70巻第1号, p.9。
- (2023) 日本体育・スポーツ・健康学会第73回大会における「ジェンダー平等社会における学校体育の在り方に関する研究」での発表資料